



Passion enlivens an area

ひろしまの

地域を動かす 伝統のひろしま神楽

広島県は全国有数の神楽どころ。近年は県外・海外でも注目され、広島独自の観光資源になりました。今回は「ひろしまの力」特別版として、地域に受け継がれてきた神楽の伝承に力を注ぎ、神楽を通して地域の絆と活力を育む北広島町・有田神楽団の活動をご紹介します。

400年以上の歴史ある神楽は、昔も今も“地域の誇り”

**先人から受け継いだ神楽を
次代に伝承するのが使命**

有田八幡神社
山県郡北広島町有田1601

太陽神・天照大御神を岩戸から連れ出すための神々の計らいが描かれる「天岩戸」。

祭神は品陀和気命(※第15代応神天皇)元は有田城付近にあったが、1515(永正12年)毛利氏による有田城落城で現在地に移転。1552(天文21年)、吉川元春によって社殿が造営された。県の無形民俗文化財に指定された3演目は江戸時代後期に神職が石見から伝えたという。



40代以下の団員が多く、活気がある団の打ち上げ。その団結力は修練の賜物だ。

天岩戸

あまのいわと

太陽神・天照大御神を岩戸から連れ出すため一番初めに舞う儀式舞「神降し」。

神降し

かみおろし

30代で団長を任せられた立盛翔太さんは、「大蛇といえば立盛」と言われるほどの名手でもある。2年前に開業した「さんまラーメン立盛」には神楽好きの地元民が集う。

練習は週3回。本番さながらの真剣な表情で練習を積み重ね、舞と樂の息を揃える。

八岐大蛇

やまたのおろち

芸北神楽に欠かせないのが神楽面。軽い和紙を張り重ねて作られているため大型化ができるという。匠の技が、伝統の神楽を支えている。

有田神楽団の代表演目「八岐大蛇」。高い木に2本のロープを結び、天空から煙を出しながら大蛇がロープにまたがり舞台に降りる伝統の縄渡りは圧巻だ。

現在の団員は有田八幡神社の氏子を中心に、中学生から70歳まで26名。周囲の神楽団に比べると平均年齢は若いとはいえ、少子高齢化が進む地域だけに神楽団を存続させるための後継者育成は大きな課題です。「今のメンバーの多くは幼い頃から神楽文化に触れた世代。小学校の学習発表会で神楽を演じたのがきっかけで神楽に魅せられた、神楽があるから地元に残つたという人も少なくありません」。そんな実体験から、年2回地元の小学校で神楽の学習・体験の講師を務めたり、夏祭りの「有田万灯祭」や隣接地区の神楽団との合同発表会を開催して若手に舞台経験を積ませたりと、独自の取り組みを始めています。また有田八幡神社の秋の大祭では朝5時まで夜通しの神楽奉納を続けており、「地

域の誇り」である神楽の盛り上がりは昔も今も変わりません。地域の人気が集う場がなくなると、つながりが希薄になり、地域の活力が衰退して祭りや神楽が存続できなくなるという悪循環が始まるのが定石。伝統の神楽を守る活動は地域の絆と活力を育む活動でもあります。

ひろしま神楽が日本の民俗芸能として高く評価されるようになつた今日では、県外・海外の公演に招かれることも多くなりましたが、立盛さんは「一番に軸足を置く地元の活動を大事にしていく」と言い切ります。その上で、神楽を次代へつなぐためには更なる勉強や刺激も必要と、古典演目「貴船」を100年ぶりに復活させたりと新たな試みにも挑んでいます。過去から積み上げられてきた伝統に進化を重ね、有田神楽団は舞い続けます。

**伝統の神楽を守る活動が
地域の絆と活力を育む**



団には古式ゆかしい神楽舞だけでなく、100年以前の草木染の衣装や面が受け継がれている。



ひろしま神楽は「芸北神楽」「安芸十二神祇」「芸予諸島の神楽」「比婆荒神神楽」「備後神楽」の5つに大別され、神楽団の数は200以上に上ります。中でも2000年代からの神楽ブームの火付け役となつたのが県北西部の芸北神楽。隣接する島根県石見地方の神楽を源流とする、ゆつたりとしたテンポの古雅な「旧舞」と戦後に登場したテンポの速い「新舞」が混在し、刺激あいながら進化してきた神楽です。「神楽団ごとに個性がありますが、うちには江戸時代から伝えられてきた古い演目の伝承を重視しています」と話すのは400年以上の歴史がある北広島町・有田神楽団を率いる立盛翔太さん。この神楽団が古式のまま守り継いでいる演目「八岐大蛇」「天岩戸」「神降し」は昭和29年に県の無形民俗文化財に指定されおり、特に「八岐大蛇」は名人芸と讃えられています。

「大きな看板を背負っているので、生半可なことはできません。所作の練習だけで3時間とか、まず基礎を徹底的にやりますし、挨拶や生活態度まで厳しく言います。舞に出ますからね。今の時代に合わせないかもしれません、古い神楽を完全な形で後世に残すのが僕らの使命ですから」。立盛さんのそんな言葉に伝統の承継者としての重圧と誇りが垣間見えます。現在の芸北神楽はパフォーマンス性が高くお客様を喜ばせる新舞に強く影響される傾向があり、実際若手から「自由に舞いたい」という声も挙がるそうですが、立盛さんはそれを頭ごなしに否定しているわけではありません。立盛さん自身がかりで団の創作演目「有田中井手の戯い」として承認してもらつたとか。「伝承」のための修練の先に「挑戦」があるー有田神楽団にはその信念が貫かれていています。